甲子園短期大学

図書館ニュース

特別号
2015.3.31

「図書館ニュース特別号発刊にあたって」

学長　瀧上　凱令

甲子園短期大学は昭和39年4月に開学しました。従いまして、平成26年度は開学50周年ということになります。この記念の年にいくつかの記念行事をいたしました。その内、学外の方にもご参加いただいた行事としては、「開学50周年記念特別展」（平成26年10月14日～26日、甲子園学院美術資料館～久米アートミュージアム）、「開学50周年記念書道展」（平成26年12月9日～14日、西宮市立北口ギャラリー）、「開学50周年記念附属図書館公開講座」（第一講：平成26年9月27日、第二講：平成26年10月4日、甲子園短期大学附属図書館）などがあります。いずれもたくさんの学外の方にご参加いただきました。とくに、附属図書館公開講座の第一講は参加希望者が多く、予定していた会場を急遽変更しなければなりませんでした。

附属図書館公開講座の第一講は「聖武天皇・光明皇后と正倉院展の宝物」をテーマとして、前半は木本好信本学特任教授に「聖武天皇没後の光明皇后－孝謙天皇と大炊王の立太子－」、後半は杉本一樹宮内庁正倉院事務所所長に「聖武天皇と光明皇后－正倉院とゆかりの品々－」と題するご講演をいただきました。参加者は109名で、学内の教職員も参加しておりますが、それよりもはるかに多くの学外の方にご参加いただきました。杉本先生には、「天皇皇后両陛下傘寿記念第66回正倉院展」（平成26年10月24日～11月12日、奈良国立博物館）の直前というお忙しい時期にご無理を申し上げました。聞かせていただく方としましてはちょうどタイムリーで、たぶんご参加いただいた方の中にも正倉院展に行かれた方がいらっしゃるかと思われます。宝物の由緒、宝物の内容、宝物の時空（宝物の時間的・空間的広がり）という構成で、画像を交えて、詳しく解説をいただきましたので、ご講演だけで十分勉強になりましたが、正倉院展に行かれた方には予習として大変役に立ったのではないかと思われます。

第二講は「源氏物語の世界」をテーマとして、前半は木本好信本学特任教授に「藤原道長と頼通・教通、能信－摂関家衰退の要因－」、後半は朧谷寿同志社女子大学名誉教授に「紫式部と藤原道長の栄華」と題するご講演をいただきました。朧谷先生には、光源氏のモデルといわれる藤原道長の栄華に至る道と栄華の様子や源氏物語との関わりを『御堂関白記』や『紫式部日記』などを引きながら解説していただき、大変興味深く聞かせていただきました。参加者は82名で、学外からたくさんの方にご参加いただきました。

甲子園短期大学附属図書館では「図書館ニュース」を毎年刊行しておりますが、その第50号（平成27年2月20日発行）に杉本一樹先生と朧谷寿先生のご講演の要旨を掲載させていただきました。しかし、もう少し詳しいのがあればということで、当日のご講演のテープ起しをしたものをもとに新たに纏めていただき、図書館ニュースの特別号として刊行し、当日ご参加いただいた方々にお配りさせていただくことにいたしました。お忙しい両先生に、講演においでいただき、図書館ニュースの原稿をお願いし、その上特別号の原稿をお願いし、誠に申し訳ございませんでした。

当日ご参加いただいた方々にはアンケートにご協力をいただきましたが、このような講演会を続けてほしいという声がたくさんありました。今後もこのような講演会を続けられるように検討いたしたいと思っております。

「聖武天皇と光明皇后－正倉院とゆかりの品々－」

杉本　一樹氏（宮内庁正倉院事務所長）

平成26年
9月27日（土）
開学50周年記念
附属図書館
公開講座より

1957年、東京生まれ
1979年、東京大学文学部卒業。
1983年、東京大学大学院修了。
宮内庁正倉院事務所所長・文学博士
著書「日本古代文書（もんじょ）の研究」・吉川弘文館、2001年
「正倉院　歴史と宝物（ほうもつ）」中央公論新書、2008年 他

ご紹介いただきました杉本です。気楽に、前の方にスライドが映りますので、昔の、紙芝居屋さんがやってきたみたいに、お聞きいただければ結構かと存じます。

前座とご謙遜でしたけれど、非常に聞きごたえのある内容の木本先生のお話の後で、すっかり聞き惚れて、久しぶりに勉強をした感じから、まだ醒めきっておりません。お手元には紙の資料をお配りしています。スライドをご覧になると、皆さん一生懸命メモを取られるんですけど、たいていの事は、紙の方に書いてあります。安心してスライドをご覧いただければ、と思います。ただ、お話の真ん中のあたり、今年の正倉院展の出しものを、続けてお見せすることになりますが、ここは紙の資料には載せておりません。会場では見られないような写真も一部忍ばせてありますが、やはり実際に正倉院展の会場にお運びいただいて、ご自分の目で見ていただくのが一番と思っております。
本題に入ります。

今日のテーマということで、聖武天皇と光明皇后について。まず一番の中心となるのが聖武天皇ですが、東大寺に伝わった、四聖御影（ししょうのみえい）図という画像を示します。東大寺を開くにあたって一番功績のあった四人の聖（ひじり）、大切な人ですね。一番大きく扱われているのが聖武天皇です。また、東大寺の天皇殿というお堂の中に今も、江戸時代の像ですが、祀られております。その右、ごく最近、東大寺に奉納されました光明皇后の絵（小泉淳作画）です。イメージとしての皇后、つい最近の作になります。

聖武天皇、光明皇后、同い年の、しかもわざわざ狙ったわけではないでしょうが、8世紀の一番最初の年、大宝元年（701）にお生まれです。亡くなられたのは、聖武天皇が西暦756年、年号で天平勝宝8歳という年であり、光明皇后はそれからしばらく後、天平宝字4年（760）に亡くなりました。

この生まれ年の701年というのは、大宝律令が、この大宝元年に制定されています。日本の古代、さらにその古代を受けて中世・近世、そして今があるわけですから、それを思うと、日本の大きな節目になった年といってもいいと思います。やがて都が奈良に移る、そうした中で結婚されて聖武天皇が即位されたのが724年のことでした。

天皇家と藤原氏の関連系図を出してみます。関係人物としては淳仁天皇すなわち大炊王。それから孝謙天皇、聖武天皇、光明皇后。一見藤原仲麻呂とはずいぶん離れた位置にいるようですが、仲麻呂の亡くなった長男のお嫁さんを、大炊王と一緒にさせた、つまり義理の親子、という側面もあるわけです。ちょっと複雑ですけれど、木本先生のお話にもあったように、場合によっては女性、奥さんとの関係をたどっていったほうが、人と人とが近い関係になるというようなこともあります。

まず聖武天皇。亡くなられたのが西暦756年。私、歴史を学んできたにもかかわらず、年号の物覚えがよろしくないのですが、さすがにこの年だけは正倉院にとって非常に重要な年ですので、頭に入っております。この年5月2日、太上天皇すなわち聖武天皇は亡くなられた。まさにその亡くなられた当日に使われたものが正倉院に残っております。その中の一つ櫃覆町形帯（ひつおおいまちがたのおび）。ご葬儀のものにしてはえらく派手ですが、丸の中に井戸の井が入っている形に縫製されています。これを、唐櫃に、そのままスポンと被せたら、いちいち結ばずに櫃カバーを押さえることができる、というものであります。ご命日が5月2日。この日は今も東大寺では、聖武祭と称して、法要が行われます。そして19日には佐保山の陵（みささぎ）に葬られました。篤く仏教に帰依された聖武天皇なので、その葬儀の様子は、ご法要を行うようであった、というふうに書かれています。その時に使われた華鬘（けまん）です。華の、華結びの飾りというふうに言えましょうか。

さて、配付資料にも書きましたが、正倉院宝物とはいったい何か、という点について、ここで少しお話をしたいと思います。

たくさんのものがあるわけですから、色々な見方があります。何を基準に分類するかにしても、何通りかありますが、由緒による分類というのが今日のお話にふさわしいかと思います。

まず、（献納宝物）、あるいは（帳内宝物）とも言います。大まかに言うと、品物が東大寺の大仏に、5回の献納によって納められた。その時に納められた品、という意味の分類です。

①の天平勝宝8歳6月21日。これは亡くなった5月2日から数えて七七、四十九日の法要にあたります。今でも四十九日、満中陰という言い方をします。この日、亡くなられた聖武天皇の冥福を祈って、後に残された光明皇后から宝物の品物の奉献がありました。「奉って献ずる」、東大寺の

大仏に品物が納められたわけです。その目録が、巻物で伝わっており、東大寺献物帳と書いてあります。中を開いていって、冒頭部分、最初の2行だけ読みますと、「太上天皇の奉為（おおんため）に国家の珍宝を捨して東大寺へ入るる願文。皇太后御製。」要するに、皇太后が自ら作られた文で、その品物を納める趣旨をここに書きます、という書き出しです。以下、格調の高いことでも有名な文章が続きます。

このような形式で、品物は納められました。願文が終わった後に出てきますけれども、品物の筆頭は袈裟。聖武天皇が使われた袈裟ということで、仏教のなかでも非常に尊ばれるものです。

この後、長い品物のリストが続きまして、飛ばして最後の所です。ここまでザーッと並んできたリストの後に、また締めくくりの言葉で、ここに挙げてある品物は皆、聖武天皇の遺愛の品であり、またお側近くで使ったものだ、と。その品々を納めて、天皇の冥福を祈ります、というのが、この長い巻物の主旨です。このリストに載っている品物は、書き出しの箇所では「国家の珍宝」という言葉で説明されており、これらの宝物については、〈国家珍宝帳〉に載っている宝物だ、という言い方をするのです。

②以下も同じで、品物はポンとそれだけで納められるのではなくて、必ずそれに目録（献物帳）が添えられる、という丁寧な、一番正式のやり方をとっています。全体に朱印、天皇御璽（ぎょじ）が押してある、というのも深い意味を持ち、その後に、関係者がサインを加えていますが、光明皇后と関連の深い紫微中台の役人たちが署名をしている、というのがわかります。先ほどの木本先生の話との関連で気にかけておいてください。

ちょうどこの6月21日、同じ日に、薬も納めているんですね。薬というのも光明皇后と非常に深い関わりがあると思います。同時に、中国から渡ってきた鑑真和上とも深い関係がありますが、薬物60種もこの時に納められています。②〈種々薬帳〉がその目録です。

先ほどの、①〈国家珍宝帳〉は、基本的に東大寺大仏に献納して、大仏とともに永久保存というのが主旨でした。一方この薬の方は、ある意味実用性を持つものですから、東大寺の中にキチッと保管しておくけれども、もし病に苦しむ者がいれば、必要に応じてその薬は広く国民のために使ってもいいよ、と書いてあります。

この6月21日の献物、①②と2グループありましたが、これは非常に大きい分量であります。この後、それの補足のような感じの献物になります。③〈屏風花氈等帳〉から後は、品目もグッと減りますし、品物の数が紙一枚ほどに収まるぐらいです。

そして、ちょっと間が空いて天平宝字2年。ある意味、政治情勢の不安定な時期ですが、ここで「大小王の真跡」が納められます。書聖といわれた王羲之という中国の書家の名前をお聞きになったことがあるかもしれませんが、その肉筆という、当時の中国にもほとんどなかったような貴重な品物、これが納められた時の献物帳が④「大小王真跡帳」です。

次に、光明皇后が自分のお父さんである藤原不比等の肉筆の書を屏風に仕立てて、非常に大切にしていた、その屏風を納めた。これが5回目で⑤「藤原公真跡屏風帳」。一連の献物では最後の献物になります。

その後に、今度は逆の動きです。宝物が、その収蔵場所から取り出されるということもありました（⑥）。先ほどの〈国家珍宝帳〉を見ていきますと、中ほどに「御大刀」、大刀が百、納められています。その中の二つ。他にも出ていて、大刀全体でいうと四口。つまり陰陽の宝劔。横刀、黒作懸佩刀（くろづくりかけはきのかたな）。これが正倉院の宝庫から取り出されました。これはこれで、話をしていたら一回分の話になりますので、端折りますが、明治時代に、東大寺の大仏のそれこそお膝下から、出てきた劔が、レントゲン写真を撮ってみたら、なんと、「陰劔」、もう一方には「陽劔」と、象嵌の銘が入っていました。これが正倉院の倉に一度納められて、そして「除物」という形で取り出された、そのものじゃないか、ということで最近話題になったわけです。

以上のように、献納、納めた時の時期がハッキリしているものが、まず一番由緒正しいものとして、A献納宝物（帳内宝物）に分類されます。それ以外にも、正倉院に入っているもの、一体どういう由来のものなのか、ということでたどっていきますと、いくつか分類できます。それをまとめてB東大寺の資財、C造東大寺司関係品、D聖語蔵経巻としました。

B群では、特に先ほどお見せしたように、聖武天皇の亡くなった後、それから一周忌に至る時期の法具類が、分量的に言うとかなりの大きさになっています。その聖武天皇が亡くなった時の、櫃覆町形帯、一周忌法要では花を盛って散華を行なう、花を撒く。その時の花籠（けご）。それから仏具類として幡ですとか、鎮鐸（ちんたく）。こういったものをスライドで示します。

それから、それに遡る大仏開眼会。天平勝宝4年（752）ですが、そこで使った品。何しろたくさんある、というのが一つの特徴です（C、Dについては省略）。

次には見方を変えて、正倉院宝物とは何か、個々の品物について見ていくことにします。

まぁ品物ですから、これは何なんだ？というのが一番最初に浮かんでくる疑問だと思います。それを項目化して、とりあえずザッとまとめると、こんな感じになります（用途別分類表）。用途別と言っても、パッと見て用途がわかるものもあれば、説明されないと用途のわからないものもありますが。こう大きく括るとその中に色々なものが含まれる。その中身を列挙してまいりますと、このようにゴチャゴチャとなるわけですね。なるべく漏れないように、と考えると、こんな項目立てになるかなぁ、と思います。

この中で、今年の正倉院展の関係では、調度、武器武具、書籍・地図、楽器・楽舞具。このあたりの実際を、スライドでお見せ致します。

また別の見方です。品物の多くは、工芸品である、という考え方もできる。するとその品を作っていくときの工芸技法という視点で分類するのもいいだろう、といえます。

特に美術史ですとか工芸史とか、そういう「研究する」立場、あるいは工芸作家の皆さんのように「自分で作る」立場ということになると、やはりそのジャンルごとに独自

の技法があり、正倉院のものが、そのジャンルでは現在残っている一番古いものになる、という例が多いのです。分類をするとこんなことになるでしょう（技法別分類表）。これは参考までに。

さらには、材質によって分類することも、当然できるんですね。これがどういう時に効いてくるかというと、その材質を知るということですから、その品物について、より良い保存方法を考えるということになる場合、役に立つわけです。その品が、無機の物質でできてるのか、あるいは有機質でできているか。それによって、どんなことをするとその品物に悪いか、というのがわかってきます。わかってくると、なるべくその悪くなる（保存にとってマイナスになる）要素から宝物を遠ざける。

私たちは、正倉院に勤めて、毎年秋になると正倉院の倉が開き、一年異常がなかったか、点検をするわけですけれど。ある意味ではその点検だって、人が触る、人が見るということでは、物にとって、保存にとって良くないかもしれない。だけれど点検しないでほうっておいて、痛みが進行するということもある。そういうあたりを意識しながら、ギリギリの選択として、やはり毎年の点検というのは欠かせないだろう、というのが、我々も先輩から受け継いだ、積み上げてきた仕事であり、一つの哲学になっています。

材質を知るというのは、そのために非常に重要なことになります。また、自然科学的な手法も取り入れて、科学的に、科学プラス経験の両方を組み合わせて、その「もの」にとって一番優しい扱い方で接するよう、我々は品物に向かっています。

以上、正倉院宝物には色々なものがあるという点を先にして、見出し・項目を示して、前宣伝しました。これからは、今年の正倉院展にはどんなものが出てくるか、ということでお話を進めたいと思います。

最初に言いましたように、たくさんの種類がある。そのうちの一番中核になるのが、聖武天皇が亡くなった後に、光明皇后から納められた品物ですよ、と言いました。そういった意味で、今年の目玉となるテーマの一つが「宮廷の調度」ということになろうかと思います。

聖武天皇の直接使っていたもの。直接使っていなくても、その宮廷にあったもの、ということでいくつか集められます。また聖武天皇が非常に篤く仏教に帰依したと、先ほども言いました。亡くなった時の葬儀の様子は、まるで法要のよう、仏教の儀式のようであった、と書かれている。そうしますと、正倉院の宝物で仏教の儀式の中で使われたようなものは、逆に、宮廷の調度を考える上で参考になるのだろう、ということになります。

今年の正倉院展については、資料の最後に枠で囲って、ちょっと宣伝がしてありますが、正倉院展として第66回になります。同じ正倉院展という展覧会が66回同じ会場で続いているのも、世の中にあまり例がない。今年はちょうど天皇皇后両陛下が傘寿、80歳のお誕生日を迎えられた、ということになりましたので、その記念として冠（前書き）がついて、10月24日から11月12日まで会期20日間、奈良国立博物館で行われます。さらにもう一つ。奈良ほど近くはありませんが、東京国立博物館の日本国宝展にも正倉院の宝物が一部出ます。こちらは展覧会の最初（10月15日）から並んでいますが、途中で展示替えがあり、宝物は11月3日までで引き上げます。そうしないと、正倉院の倉が閉まるのに間に合わないからですね。混乱しますので、今日のお話の中では、正倉院展、奈良の方の出陳品目を中心にお話をします

【左図】鳥毛立女屏風
［とりげりつじょのびょうぶ］
（鳥毛貼りの屏風）
〈第4扇・部分〉
平成十一年　正倉院展目録　18p
奈良国立博物館：発行

宮廷の調度のなかでも、一番知名度の高い宝物が、この鳥毛立女屏風（とりげりつじょのびょうぶ）です。

正倉院の品物は、非常に名前が難しいという定評があります。ですので、せめてフリガナをふりましたけれど、これも人によって「とりげだちおんなびょうぶ」と読む人もいたり、「とりげりゅうじょのびょうぶ」と読んだり、いろいろです。基本的には漢字の方の名前がどう書かれているかが大切で、それをどう読むかはその次ということになりますので、読み仮名はあまりこだわらなくてもいいと思いますが、何でもいい、というのもあまりに無責任なので、一応今回はこう読もう、という名前をフリガナとしてふってあります。

右の方の写真は、先ほどの〈国家珍宝帳〉の該当部分の記載です。鳥毛立女屏風六と書いてあります。今はバラバラになってますけれど、これが6枚で一つのセット。つながって屏風（今と同じような形です）、と書かれているわけです。

で、西の奈良博で展示するのが、2番目・4番目、そして5番目・6番目。最初はこう並んでいただろうという順番で、今はこういうバラ売りができるわけです。残る2枚。これは東京の方、ご覧になるには上野の東京国立博物館へ行っていただく。これも期日限定ですが、奈良と東京へ行くと、6枚分全部が見られる、ということになります。

この屏風は、ちょうど昭和60年に修理をしました。これがまた貴重な機会でしたが、私もその修理…修理そのものでなくて、修理をする時でないとできない調査に参加をしました。

私が何をやったかと言うと、絵の書いてある紙を裏から見たのですね。屏風というのは、今もそうですが、ふすまのように下地がまずある。その下地は、最初に木の骨を麻布で巻いて、骨を縛り、その縛った上から紙を何重にも貼り重ねて、温度湿度の変化で中の骨が多少動いても、何重にも貼り重ねた紙の上に支えられた、この最終的な一番表の絵の部分は、あまり動きがないような工夫をしている。単なる絵画作品でしたら、キャンバスなり、板なり、そういう所に絵を書いておしまいですけれど。屏風というのはそういう狂いが生じない。狂いが生じても絵に影響がないような作り方をしています。従ってこれの修理ということ

になると、骨から外して、画面をうつ伏せにし、何重にも貼られている紙を裏から順にめくっていく、ということになります。

その時に、めくった紙、一層一層、一枚ずつ剥いでいきますので、それを点検し、最後に、絵が書かれた本紙そのものまで調査が到達しました。びっくりすることに、絵を書いた紙、これは使い古しの紙だったんですね。それで結論的に言うと、大仏開眼会からちょっとたった時の、日本の紙、日本で使われた紙を再利用してこの絵を書いている、ということでした。それで何がわかったか、ということになると、屏風を制作した場所は、日本で作られた。いつ作られたのかといったら、その文書が反古になったより後。しかもこれは、先ほどの天平勝宝8歳には東大寺に屏風として納められているから、そのわずか数年の間に作られたという時期の絞り込みもできた、ということになります。

修理をし終わると、そういう情報は全部、現在の屏風の中に封じ込められて、また遠い将来、修理をされる時までは、たいていその情報は眠っているわけですけれど。その修理の時に立ち会うことが私はできたわけです。

調度品の続きということで、〈国家珍宝帳〉の一番最後のところが出てますけれど。品目のリストがずーっと続いてきて、ここで終わる、その最後の二つの宝物。これが今年は正倉院展で見ることができます。

一つが紫檀木画挾軾（したんもくがのきょうしょく）というものです。これ、全体の姿を見せると、こういう…。時代劇に、肘をついて、もたれかかる脇息（きょうそく）というのが、まあ、あんまり時代劇っていうのもテレビでやらなくなりましたけれど。見てると出てきます。それの古代の例です。

紫檀は木材の名前ですが、ここは本物の紫檀、別の部分は紫檀風に見せかけた偽物と、使い分けています。木目を生かした、木工品としても非常に綺麗な出来のものですけれど。肘をついてもたれかかるために、上にはこういう綾のクッションが置かれます。これが、天板の上に乗るんです。

【左図】紫檀木画挾軾
［したんもくがのきょうしょく］
（ひじつき）
平成十三年
正倉院展目録　18p
奈良国立博物館：発行

もう一つがベッドで、これには御床（ごしょう）という名前がついています。寸法で言いますと四尺八尺ということですから、二つ並べると八尺四方のダブルベッドのようなものが出来あがる。

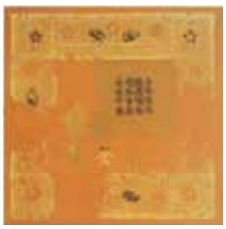
この上には畳を置き、畳の上にはベッドパッドを置き、その上からご丁寧にベッドカバーもつく、というようなことでありますけれど。こういうあたりのものが、痛みがひどいとはいえ、揃ってセットで残るというのも正倉院ならではのことであります。

御床（ごしょう）。四尺八尺と言いましたけれど、それなりの寸法ですので、ツインで二つあるうちの一つだけを出陳します。そこに乗っていた畳ですが、このような状態。まあ仮にですけれど、これが正倉院でないところにあったら、単なる古畳ということになってしまうでしょう。本当に有害ゴミに入りそうですが、正倉院の中にずっとあるお蔭で、これは何だということになりまして、そういえば〈国家珍宝帳〉の記載では、黒地錦の縁のついた畳が御床の付属品だということで、よくよく見てみると、その欠片も痕跡が残っているんですね。で、その畳も関連品として出します。

それからこれはベッドパッド（褥）ですね。これまた長辺で3mくらいはある大きいものです。これは縁を折り返して、縫い合わせて使った。その内側の折った部分の寸法は、やはりベッドにピッタリはまります。文様をよく見ると、こういう亀甲型の錦です。染織の専門家に言わせると、模様としてはこちらの方が表、こちらが裏と区別がある。錦としては裏にあたる側を、製品になった段階では、逆転させた形で使っています。

それから、人勝残欠（じんしょうざんけつ）。今年は両陛下のお祝いということがありますので、ちょっとおめでたい品であります。

これは何かな？と思われるでしょうけれど。お正月の、7日に交換されると言いますか。贈ったり贈られたりする、グリーティングカードです。年の初めですから年賀状にも相当するかもしれません。おめでたい文句を入れたり、華やかなこういう飾りをカードにして、カードの交換を行ったという、その欠片と言われています。よくよく見てみると、どうやらこれは2種類の違うものを寄せ集めて、一枚にまとめているようです。こういう子ども、あるいは犬の一狆のような形が残っております。



【左図】人勝残欠
［じんしょうざんけつ］
（新春の挨拶状）
平成十年　正倉院展目録　44p
奈良国立博物館：発行

続いて靴（衲御礼履：のうのごらいり）になります。これは聖武天皇が大仏開眼会の時にはいた靴そのものではないか、と考えられます。革製の靴ですが、表の赤い革は鹿のスエード。全体は牛革で作ってあり、非常に手の込んだ装飾がなされています。これを入れる箱です。箱としてはシンプルな形でありますけれど、測ってみますとさっきの靴の形に合わせて、底に少し掘りくぼめた部分があります。恐らく、靴を置くと滑らないような仕組みになっている。

こういうふうに、手が込んでいるというところもそうですし、手が込んでいるんだけれど、キッチリ寸法通りに、細かいところまで厳密に合わせるっていう感じでもなくて。どこか大らかなところ。その辺りが奈良時代の気分と言いますかね。天平風なんだろうと思います。

【右図】衲御礼履
［のうのごらいり］
（儀式用の靴）

平成十一年
正倉院展目録　76p
奈良国立博物館：発行

箱類、これは恐らくは仏様にお供えをする時に使われたものですけれど。宮廷調度の参考にはなると思います。こ

れ（金銀平脱皮箱）は革でつくってあります。これは牛革ですが、濡らすと革は伸びますので、こういう箱の形に伸ばして、伸びた状態で固定して漆を塗ってそのまま固めてしまう。そこに金の板、銀の板。これは非常に薄くのばした板ですが、模様を作って貼り付けて、漆を塗って、漆の中に埋めてしまう。そして最後に、その模様のところを、漆を剥ぎ起して、模様が出てくる、という作り方になっています。

別の箱。これは華麗な花模様。これは木で作り、絵の具で中を塗っています。真ん中の所についてるのは鍵です。大事なものには鍵をかける、ということです。

それから今度は、檳榔木画箱（びんろうもくがのはこ）という名前の箱。箱の類は、表と、それから蓋をとった時の中のデザインと、その組み合わせが面白いものが多いんですね。蓋をした状態では全体に檳榔、南洋産の木材の茶色っぽい色が目立つのですが、その蓋を取ってみると、こういう派手な状態になっています。中は彩色されて、五弁花の散らし文様があり、狭い縁の部分まで模様が入っています。蓋の内側もこんな真っ赤に塗っているということで、蓋を取る前と後で、対比が鮮やかになっています。

【左図】檳榔木画箱
［びんろうもくがのはこ］
（献物箱）
平成十二年
正倉院展目録　113p
奈良国立博物館：発行

仏前にお供え物をする時には、「几（つくえ）」という言い方をしていますが、こういう小さな台も使いました。台の上にまた、こういうマットを置いて、その上にお供えする物を置くというのが典型的なやり方ですね。

こんな形の台（金銀絵長花形几）もあります。このように脚に凝るのも当時の流行でした。真横から見ますとこんな感じで、6本脚。天板に接着剤で脚を貼り付けただけですので、そんな重いものを乗せるわけではないけれど、上から強く力を加えると脚が外れてしまうかもしれない。向こう側の写真は裏っ返しにして置いたところです。

吹絵紙という装飾のある紙。これは素材であって、これからまた何かの用途に使うんでしょうね。型紙を置いて、そこの上から絵の具を霧状に吹きかけて、型紙を取るとこうやって模様が白抜きで出てくる。

この雑玉幡は、ビーズを針金で連ねて籠ふうに形作ったもの。

【左図】雑玉幡　残欠
［ざつぎょくのばん　ざんけつ］
（玉繋ぎの編みものの残欠）
原色日本の美術　第4巻　正倉院　125p
小学館：発行

ガラス製の水差し。かなり有名なものです。これはたぶんシルクロードをはるばると、という品物のうちの一つであります。

それから鏡。これは丸い鏡ですね。海獣葡萄鏡という類です。海の中にいる怪しげな獣たち、それと葡萄のデザイン。それから、それの四角い版の鏡。鏡というのは、この当時金属製で、金属をピカピカに磨いて、顔をうつすというふうに使っていました。今写真で見ている面は、鏡でいうと背中側、裏側になります。これも鋳あがりといいますか、銅を鋳造して作る、その出来栄えが素晴らしい。上から見ているだけではなくて、斜めから立体的に見ると、本当に獣が首をもたげている姿がよく現れています。

【右図】白瑠璃瓶
［はくるりのへい］
（ガラスの水さし）
原色日本の美術　第4巻　正倉院
122p
小学館：発行

丸い鏡、四角い鏡があるので、ついでで三角形のものも用意をしてあります。

原色日本の美術
第4巻　正倉院
62p
小学館：発行

【左図】鳥獣花背方鏡
［ちょうじゅうかはいの
ほうきょう］
（海獣葡萄鏡）

こういったものを、形はこっちの方がよく見るのかな。「漆四合香箱」と、これまた難しい名前ですが、四つ合わせて形になる、というような意味合いの名前がついています。こうやって四つ集めていって、立体感がなくてわかりにくいですが、花形の輪郭を持った一つの器として使われたのかもしれません。オードブルの容器に、こんなものがありますよね。

これを見ますと「飛」という文字が、高台という足元の部分に入っています。どういう意味なのか。今のところ謎であります。

その他に染織品。これは箱にスッポリ被せる形のカバー（緑地錦碁局覆）。このような形で縫ってあります。それから敷物で「暈繝錦几褥」。切れたところは紙で補修していることがわかります。

このような具合で、宮廷の調度の一端を。展覧会場へ入っての並び順だと、これがバラバラに出てきますけれども、こうやってテーマでまとめてお見せしました。

今年の特徴の、もう一つが武器武具です。木本先生のお話に出てきました、藤原仲麻呂。

仲麻呂は天平宝字8年（764）に戦乱を起こして（恵美押勝の乱）、敗れて死ぬわけですが、その年から数えて1250年目に当たるのが今年（2014）です。それに因んで、というのも妙ですけれど。武器武具を少し、ここ数年出していなかったので、まとめて出しております。

その中でもやはり由緒の正しいのが、御杖刀という刀です。例によって〈国家珍宝帳〉の記載。刃の長さとか、切っ先の形。それから柄の型、材質。それをこういうふうに事細かに記してあります。この写真の姿、ちょっと記憶していただいて、次の写真です。頭（把頭）のところですが、実はこれは仕込み杖なんですね。見かけは一本の、漆を塗った杖。頭のところはこういう象牙の飾りがついている、ということになりますが。この中に刃が隠れている。先ほど、

一枚前の写真がそれをちょっと引っ張り出している写真。引っ張り出すと、こういう状態になる、ということです。

この刀身、刃の部分の品質も非常に高い。よく鍛えられている刀であります。刀身がこのようで、そして杖。この鞘全体のプロポーションでいうと、お見せしているぐらいの比率になります。刀身が鞘と同じくらい長くなると、簡単には引き抜けないわけですね。その他、石突の方にも、把の責金（せめがね）の方にも金属の象嵌が入っており、非常に水準の高い作りであります。

他の刀剣、刀剣に限らず最初に献納された武器は、藤原仲麻呂が反乱を起こした時に、東大寺の正倉院の倉を開けて、実戦用に本当に持ち出され、乱の平定した後に、再び東大寺に返ってくることになりました。このため、当初納められた武器類の中から、正倉院展に出るものは少ないのですが、数少ない例の一つが先ほどの御杖刀。あれは儀式用の刀、実用ではないという方もいますが。

次は弓と矢です。弓は写真に出ていませんが、矢と、矢の容れもの（胡禄：ころく）です。矢は50本出て、それにもう一つ、鏑矢とは違いますが、特殊な矢が揃えてある。昔、胡禄の中に矢が入っていた状態はこんな具合です。

それから手鉾という、後の長刀につながっていくような、ちょっと不思議な形をした刀剣も。

さらには、その藤原仲麻呂自身が書きました「東大寺封戸処分勅書」（とうだいじふこしょぶんちょくしょ）という文書があります。仲麻呂の書いた字というのは、いくつか残ってまして、先ほどの〈国家珍宝帳〉と、それに続く献物帳に名前が出てまいります。その中でも一番最後の、この藤原恵美朝臣、恵美押勝と名乗っていた時期に書かれた東大寺封戸処分勅書は、全文が仲麻呂の自筆だと言われています。その他は時期によって、「仲麻呂」という自署すなわち自分で書いた名前の部分、あるいは藤原朝臣、藤原恵美朝臣という、その「朝臣」だけを自筆で書くというやり方もあります。

平成十三年
正倉院展目録　50～51p
奈良国立博物館：発行

【上図】東大寺封戸処分勅書
［とうだいじふこしょぶんちょくしょ］（封戸の使途区分を定めた勅書）

また、仲麻呂の勢力の強い時期には、東大寺との勢力のせめぎ合いのようなところもありました。そのあたりの政治情勢を反映した、東大寺領のいわゆる荘園の絵図。これも展示されます。越中国、今の高岡市の郊外だそうですけれど、そこの開発を示す絵図です。

仲麻呂に限らず、文字というのは、非常に格調の高いもの、そうでないもの、色々ありますけれど、やはり書き手の精神的なものをよく映すように感じます。そういう意味では、今年出します梵網経というのも、非常に注目される作品だと思います。それを入れた経筒と一緒に、展覧会に出ます。

それから書と言えばもう一つ。先ほど鑑真和上の話が出ましたが、中国から、大変な苦労の末、日本にたどり着いたわけです。私なりに調べて、恐らく鑑真さんが中国から持ってきたお経そのものである、と考えております「四分律」（しぶんりつ）というお経も出ています。

文字のものを見ていると、ずいぶん堅苦しくなりますので、次は伎楽面のご紹介です。こちらは人間の顔ですから、非常に楽しいわけであります。後の時代、例えば能楽。お能なんかにも面を使いますが、能面っていうのは基本的に顔を全部を覆い隠すほどの大きさではないですよね。顔の中心部にそのお面がくる。それに比べますと、この伎楽面というのは、もうフルフェイスのヘルメットみたいなもので、後頭部まで形づくられていて、それをスッポリと被る。ということは、この伎楽面は基本的には台詞はしゃべれない。しゃべっても、中でモゴモゴ言ってるだけで聞こえなかったと思います。その代わりにこの面、造りだけを見ても派手な、誇張した表情でありますから、この面を被って身振り手振りで、音楽も入って、賑やかに演じられる。それがこの伎楽面です。一つ一つ見ていきます。

【左図】崑崙［こんろん］
平成十年　正倉院展目録　44p
奈良国立博物館：発行
【右図】酔胡従［すいこじゅう］
平成二十五年
正倉院展目録　38p
奈良国立博物館：発行

この伎楽面については、修理が、始まって20年ちょっとになりますけれど、系統立てて修理を行っています。修理前の状態では、展覧会に出すことはとてもかなわなかったわけですが、修理事業が始まって、ある程度進んできましたので、その成果という形でもご覧になっていただこうということで、毎年、出たり―まあ出ない年もありますが。そのうちの崑崙（こんろん）面であります。これは耳を見るとわかりますけど、人間の耳ではないわけですね。牙もあるし、顔つきからして半ば獣の姿をしております。ストーリーは身振り手振りで進みますが、見ての通りの悪役ということで、女性にちょっかいを出して懲らしめられる。そういうちょっと間の抜けた役であります。

それから酔胡従という、これも役柄の名前でありますけれど。「酔」で「胡」で「従」ですから、酔っ払ったペルシャの王様に付き従う従者。酔っ払いということで、赤い顔。それから胡というのは胡人。西域、西の方の人々の顔つきを誇張してうつしたものですから、こういう鼻の長い形になっています。酔っ払っているのでこういう顔だということです。

次の面。これは作り方が違うんです。木を使って彫って作ったものではなくて、麻布と漆で作る。「乾漆」という言葉がそれを意味しています。乾漆面の酔胡従。これも同じ役柄ではあります。

以上のお面、修理をしたと言いましたが、修理前は、例えば酔胡従では鼻と耳が取れていて、寂しげな顔つき。修理して鼻がついても、目が開くわけではありませんが。

もう一つの酔胡従も、これ修理前は鼻のところがきちんとついていなくて垂れ下がっていました。修理をして、こういうふうに鼻がちゃんと元の形になったというわけであります。

伎楽面、お好きな人は好きで、見てても飽きないんです

が、内側を見るのがまた面白いんですね。崑崙は、表側は「悪い」顔をしてますけれど、内側はスマイルマークみたいな。素朴な顔つきです。次の酔胡従の内側は、仏様の、いわば瞑想しているような顔で。逆に乾漆面の酔胡従の方は、表と同様の、何か「悪そうな」顔です。

これは実は木彫面、木で彫った面と、この乾漆面の違いがよくわかる。木で彫った方はこれ一つの、一本の材木からどんどん刳って、彫って彫って、また彫って、こういう形にしていきます。内側は顔が接するので、被る人に邪魔にならないように、なだらかに仕上げるわけですね。ところがこの乾漆面というのは、元の型に布を貼り重ねて、形を作って、ある段階でその型から剥がして。内側の型は例えば粘土だったりします。元の彫刻を作って、そこに貼っていくわけですけれど。それを剥がし取るわけですから、ちゃんと、その元の形通りに内側にも顔ができる。こういう製作技法の違いも反映しているわけです。

で、伎楽に関連した衣裳。上着とか下着、靴下。そういったものがもちろん展示に出てまいります。

正倉院らしいところでは、その衣裳を一まとめに包んだ風呂敷もちゃんと残っています。風呂敷にはその中に何が入っている、というセットの細目も書いてあります。

音の出るものでは楽器。これは阮咸（げんかん）という弦楽器です。江戸時代の「月琴」という楽器と形が似ていますけれど。阮咸は、それほど日本では流行らなかったようです。中国にも、同じ楽器そのものというのはごく少ないようです。

【左図】桑木阮咸
［くわのきのげんかん］
（弦楽器）
平成十四年
正倉院展目録　35p
奈良国立博物館：発行

それでは阮咸の見所を。まず一つは、この中心の部分ですね。ここはバチで演奏しますので、実際に木に直接バチが当たると傷がつく。ということで、ここに皮を貼ります。そこに画かれた絵が、一つの見所になっています。深い森の中で、隠者というか、仙人のような人々が3人。2人は碁盤を囲んで、1人はその試合の成り行きを見ているところです。

それからもう一つが、二つの丸い部分。見ようによっては顔の両眼のようにも見えますが、この部分を赤外線カメラで見ると、二つの画像が出てくる。

これは何かというと、形を復元しますと、片方は丸の中に3本足のカラスが入っていて、もう片方は中心に木があって、その両脇に、一答えを知っているからこう説明できるわけですが一、ヒキガエルとウサギがいる。要するに最初のほうは太陽のデザインなんですね。中国の古典でも、太陽の中には3本足のカラスがいる。もう一つのほうは月の象徴です。ですから月の桂。月桂冠というお酒もありますが、桂があり、今でもウサギがいる、と考えますね。ヒキガエルも月の中にいるということになっています。

これはもっと展開していきますと、これは私の説ですが、「則天文字」という、中国の、ちょうど日本では古代に相当する、一時期だけ使われた文字があります。いくつかのオリジナルの文字が作られましたが、日の画像は、恐らく則天文字の「日」につながり、月の画像は、デフォルメしていくと則天文字の「月」になっていく、というふうに私は考えています。

この阮咸を入れた袋。これも一緒に展示します。

最後は駆け足になりましたが、品目の紹介はこれで終わります。ここでちょっと、資料プリントに戻っていただきます。

最後に、正倉院宝物の時空という項目を立てています。時間的要素ということで言いますと、やはり大仏開眼会あたりを中心とする天平勝宝年間。

木本先生のお話になったのも、BからE、天平勝宝から宝字にかけてですが、正倉院の宝物として残っているのも、ちょうどそこら辺を中心にしています。もちろん正倉院宝物というのは、地上で人間の手によって守ってきたものですから、ずっと後の時代のものも含まれていますが、やはりある意味、奈良時代を閉じ込めたタイムカプセルといった意味合いがあります。

それから、空間的なことを考えますと、正倉院という東アジアの、東の端のものでありますけれど、やはり、その時代が持っていた古代東アジア世界への空間的な広がりを反映している。

よく言われるような、中国から入ってきた、あるいは西の方から入ってきたものというのは、案外多くはありません。そういった外からの文化的な影響を受けながら、日本でそれを日本なりに再生した。作り替えて、また自分たちのものとして生み出したものが多く残っている、ということになります。

さらに、今日のお話から自ずとわかると思いますが、天皇の、まさに天皇が自分で使っていた。そういったところから、一方で庶民が使っていたような品まで、やはり幅広い。その両方が含まれている、ということが、一つの特徴であります。

また、そのもの自体のシチュエーションといいますかね。大仏開眼ですとか、天皇が亡くなるとか、そうした飛び抜けて非日常的な要因によって生まれたものもありますけれど、一方で正倉院文書。これは今日はあまりご紹介していませんが、普段、都の役人が、あるいは都に住む庶民が、過ごしていた日常を反映したものもある。そしてそのうちのかなりの部分は、やはり当時の仏教の色彩、仏教色というものが感じられます。

十分なまとめにはなりませんが、お話ししたような、非常に多彩な正倉院宝物の代表を、今年の正倉院展でもご自分の眼で見ていただきたい、というふうに思います。

時間もまいりましたので、私の話はこれくらいにして。今日しゃべった通りのことが、ご自分の眼で見た時にも本当にそう感じられるかどうか。また会場で確かめていただきたいと思います。

では、これで終わります。

［解説の宝物すべての写真を紙幅の都合で掲載できなかったことをお断りします。］

開学50周年記念附属図書館公開講座（第二講）

「紫式部と藤原道長の栄華」

朧谷　寿氏（同志社女子大学名誉教授）

平成26年
10月4日（土）
開学50周年記念
附属図書館
公開講座より

1939年、新潟県生まれ
1962年、同志社大学文学部卒業。
平安博物館助教授、同志社女子大学教授を経て、現在、同志社女子大学名誉教授。
2005年京都府文化功労賞受賞。
著書「藤原道長」ミネルヴァ書房、2007年
「王朝と貴族」集英社、1991年
「藤原氏千年」講談社、1996年
「源氏物語の風景」吉川弘文館、1999年　他

朧谷でございます。60分よろしくお付き合い願います。

藤原道長（966～1027）には2人の妻が知られますが、いずれも藤原氏の出ではありません。つまり同族からではなく、いずれも源氏の娘を嫁にしているのです。一般に源氏といえば、鎌倉幕府を開いて初の武家政権を打ち立てた、あの源頼朝の源氏を思い浮かべますが、あれは清和天皇から出ている清和源氏でして、後の歴史に鑑みると武家源氏と言ってもよいかと思います。この清和源氏は摂関時代には一人の公卿も出していないほどに地位が低く、摂関家など上級貴族の護衛役に甘んじる存在に過ぎなかったのです。道長が妻に迎えた源氏は、先ほど木本さんが紹介された村上源氏とか醍醐源氏といった系列の源氏なのです。この源氏は摂関時代に大臣以下の公卿を輩出するなど大きな力を持っていました。

これは冗談のような本当の話らしいのですが、『源氏物語』を読んでいた人が、「いつになったら頼朝や義経が出てくるのだろう」と、言ったとか。『平家物語』から連想すると、ある意味で当然の疑問かもしれません。架空小説である『源氏物語』の主人公のモデルと考えられているのは清和源氏ではなく、嵯峨・醍醐・村上源氏といった系統の人たちです。紫式部の脳裏には、主人公を賜姓皇族（皇親賜姓）とする、と言った意識が強かったのではないでしょうか。賜姓皇族とは姓を賜わって臣下となった皇族のことです。そもそも賜姓皇族とは皇族の人数を一定数で抑えるためにとられた制度です。

『源氏物語』の冒頭の「女御、更衣あまたさぶらひ給」うことで皇子女の数が膨らみ（嵯峨天皇の皇子女は50人近くで醍醐天皇は35人）皇室財政が逼迫する、その防止策と言ってよいでしょう。それにはルールがあって身分の低い妃の子女から臣下にしたのです。賜姓皇族で源姓を賜わると賜姓（しせい）源氏、平姓ですと賜姓平氏…と言いました。

茗荷御紋蒔絵小箪笥 源氏物語54冊入
（甲子園学院美術資料館所蔵）

妻2人とも賜姓源氏から得ている道長は、きっと尊貴性に目を付けたのではないでしょうか。つまり臣下の藤原氏が婚姻を通して家格を高める、という思惑があったと考えます。系図をご覧ください。一人は宇多源氏の倫子、もう一人は醍醐源氏の明子です。彼女たちは藤原道長と結婚しても姓は変わりません。当時は夫婦別姓なのです。ただ所生の子供は父親の姓になります。藤原頼通、彰子…というふうに。そして別姓の妻はお墓も別です。藤原氏のお墓は宇治に行く途中の木幡（「こはた」「こわた」）という所にあって、藤原姓の人はここに葬られますが、他姓の人は入りません。このように当時の女性は死ぬまで生をうけた家の制約を受けるのです。ですから倫子は宇多源氏の墓地、つまり仁和寺の裏山ということになります。因みに仁和寺は光孝天皇の発願で造りはじめ子の宇多天皇が完成させたお寺です。宇多天皇は譲位後、ここを御所としたので「御室（おむろ）」という地名が生まれたのですが、上皇の居所を敬った名辞ということです。

倫子の父の源雅信と明子の父の源高明はともに宇多天皇の孫ですから2人は従兄弟の関係にあり、高明の父は醍醐天皇です。従って家格は同格と言えるでしょうが、娘の結婚の時点において雅信は現役の左大臣、左大臣源高明は安和の変で失脚しており、両家には大きな開きがありました。そのことが所生の子たちの昇進に影響を及ぼします。倫子腹の男子2人は摂関となり、4名の女子は天皇ないし東宮に入内しているのに対して、明子腹の子女は誰もそこまで至っていません。そして道長の栄華を支えたのは倫子腹の子供たちなのです。同じ道長の子でありながら母の立場によってこのように差異があったのです。紫式部もそのことを強く認識していたと思われます。

「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに」で始まる『源氏物語』の冒頭部の話を系図にしたものをご覧ください。いつの御世であったか、とありま

すが醍醐天皇の御世あたりと言われています。私は嵯峨天皇代も作者の認識にあったのではと考えてますが…。「いとやんごとなき際にはあらぬ」、そんなに尊い身分ではなかったが帝の寵愛を一身に受けた女性がいた、それが桐壺の更衣ということです。天皇が夜、お過ごしなるのは清涼殿の中の夜御殿（よるのおとど）です。この天皇の居所の北側には、お妃たちの住まいする後宮、七殿五舎が櫛比していて回廊が廻っていたのです。清涼殿の近くには、藤壺（飛香舎）、弘徽殿（こきでん）といった地位の高い妃の殿舎があり、桐壺（淑景舎）などは一番離れた場所に位置していたのです。したがって桐壷の更衣が天皇のところへ行くには身分の高い妃たちの傍を通らねばならず、そこで汚物を撒き散らすなどの嫌がらせをされるわけです。こうした苛めにより桐壺の更衣（父は大納言で故人）は亡くなってしまいます。そして彼女の産んだ皇子は皇族を離れて臣下となり、弘徽殿の女御（父は右大臣）が産んだ皇子は天皇（朱雀院）になっています。

青表紙本系統（江戸前期写）
『源氏物語』
（甲子園学院美術資料館所蔵）

古活字版（慶長年間）嵯峨本
『源氏物語』
（甲子園学院美術資料館所蔵）

光源氏のモデルとして何人かの名が挙がっていますが、作者の意図は賜姓源氏、ということです。もちろん道長の要素は作品に多く取りこまれているでしょうが、彼は藤原氏なのです。

系図をご覧ください。道長は摂関藤原兼家の五男でして、同腹にかぎっても兄が2人いました。長兄が道隆です。その娘の定子は一条天皇の中宮となって敦康親王を産んでいます。この親王は第一皇子でしたから東宮を経て天皇になれる人でしたが、後見人となるべき祖父、関白道隆が43歳で死去したことでその可能性は弱まり、母の定子も24歳で亡くなり、その道は閉ざされました。定子に仕えたのが清少納言です。彼女の手になる『枕草子』には中関白家と称した道隆家の華やいだ暮らしが余すところなく描写されています。

長兄の死に代わって関白となった次兄の道兼（35歳）が流行病に捕まり10日余りで亡くなります。働き盛りの二人の実兄が相次いで世を去り、病弱の道長が生き残ったのです。しかも兄のみならず上席のほとんどの公卿が疫病で命を落としました。道長は強運いがいの何物でもありません。政権のトップに躍り出た彼は、12歳の娘の彰子を一条天皇に入れて強引に中宮に押し上げ、ひたすら皇子の降誕を期しますが、なかなか生まれず焦ります。実現するのは9年後のことです。

史料Ⓑは藤原道長の日記『御堂関白記』です。この日記はわが国に残る最古の自筆日記として京都の陽明文庫に架蔵されています（14巻の自筆本をはじめ古写本など国宝）。昨年ユネスコの記憶遺産に登録されたのでご存知の方もおられるかと思います。この日記は活字本でも出版されています。誤字・脱字・当て字などが多く、道長の大らかさが指摘されたりしてますが、当の道長が現状を知ったら怒るでしょうね。「件の記など、披露すべきに非ず。すみやかに破却すべきなり」（原漢文）と自筆で認めているのですから。

次に史料Ⓒをご覧ください。『紫式部日記』の冒頭です。この日記は、道長から「これから我が家では皇子（彼の脳裏には皇子しかなかった？）が生まれるので、その出産の様子を記録してほしい」、という依頼により成ったと言われてます。

> 秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりのこずゑども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

寛弘5年（1008）7月、出産を控えた中宮彰子は、生まれ育った土御門殿（つちみかどどの）に里下がりします。出産は穢れを伴うので宮中では許されません。平安京図を載せておきましたが、その場所は、今日の京都御苑の一郭、京都迎賓館の南にあたります。平安時代のこの辺りは、有力貴族たちの一町家（4,300坪程）が建ち並ぶ高級住宅街でして、土御門殿は南北二町を占める広大な邸宅でした。道長は平安京の数ヵ所に邸宅を所持してますが、土御門殿は道長の栄華の舞台となったところです。天皇になった道長の三人の孫もここで産まれています。里下がりには紫式部ほか多くの女房たちがついて来てます。一条天皇は29歳、中宮彰子は21歳、道長は43歳、当の紫式部は30台半ばと言われてます。

出産を控えて慌ただしい様子や池の周囲の風情が伝わってきます。遣水というのは中島の中の池に引き入れる人工的な水路のことです。今の京都では知られないのですが、昔は南北の通り、烏丸・室町・西洞院通りなどに沿って多くの川が流れていたのです。近世に描かれた洛中洛外図や明治期の地図にも見えます。「不断の御読経」、道長家に対抗して密かに出産を呪ってる輩はいるでしょう、それに打ち勝つための安産祈願の読経です。だんだん涼しくなって風が吹き出し、昼間は喧騒で消されていた遣水の音と読経の声が入り混じって作者の耳元に聞こえてくるのです。里下がりして50日ほどで子どもが産まれます。誕生したのが第二皇子の敦成（あつひら）親王です。のちの後一条天皇となる人です。

史料Ⓓをご覧ください。
「午の時に、空晴れて朝日さし出でたるここちす。たひらかにおはしますうれしさのたぐひもなきに、男にさへおはしましけるよろこび、いかがはなのめならむ」。お昼頃に空が晴れて朝日が差し込んだ心地、とは道長の気持ちを代弁しているのでしょう。安産のうえ他ならぬ皇子が誕生したのですから尚更のこと。「十月十余日までと、御帳出てさせたまはず、西のそばなる御座に、夜も昼もさぶらふ」。中宮は出産のあと調子が悪く、一月ほど臥せっておられたようで、その間、作者は夜も昼もずーっと控えていた、と。「殿の、夜中にも暁にも参りたまひつつ、御乳母の懐をひきさがさせたまふに、うちとけて寝たるときなどは、何心もなくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ」。道長が夜討ち朝駆けで若宮の顔を見に訪れては、乳母の胸の中で眠る御子を抱き取ろうとする。いうまでもなく皇子は乳母の乳を飲んで育つのです。気を許して寝ている乳母が寝ぼけ眼で目を覚ますと、そこに道長がいる。うかうか寝てられませんよね。こうした愚痴を紫式部に漏らしたのです。

「ある時はわりなきわざしかけたてまつりたまへるを、御紐ひきときて、御几帳のうしろにてあぶらせたまふ。『あはれ、この宮の御しとに濡るるは、うれしきわざかな。この濡れたるあぶるこそ思ふやうなるここちすれ』と、よろこばせたまふ」。道長が若宮を抱き上げた時におしっこをされた。そこで濡れた袍を乾かしながら、傍らにいた公卿たちに向かって「あゝ！若宮のおしっこに濡れるなんて、こんなに嬉しいことはない。濡れたのをこうして乾かしていると、思い通りになった心地がする」と言って、道長は喜んだのです。

文化庁監修『国宝』2・絵画Ⅱ　毎日新聞社発行
紫式部日記絵詞（藤田美術館）第六段
「行幸に備えて新造の龍頭鷁首の船を見る道長」より

ひと月後に一条天皇が皇子と対面するために土御門第に行幸して参ります。この日のために道長は龍頭鷁首の船を新調しました。曳き出される船を土御門殿の釣り殿から眺めている道長の姿が『紫式部日記絵巻』に見えますが、道長像の絵画資料として最古のものと思います。対面の様子など詳細な記述があるのですが省略します。なおⓃは若宮誕生から50日目、つまり五十日（いか）の祝いに関する史料です。この時点で「若紫」の巻の存在が知られるなど『源氏物語』に関して重要なことが解るのですが、紙数の関係で省略して先に進みます。

彰子は次の年にも皇子、敦良親王を産みます。のちに後朱雀天皇となります。道長の栄華形成の最大の貢献者は彰子と言ってよいでしょう。

一条天皇が32歳で崩御し、皇太子であった三条天皇が即位し、敦成親王が皇太子となります。この段階で道長の脳裏には、自分の目の黒いうちに東宮の即位を、と思ったことでしょう。眼病に苦しむ三条天皇を圧迫し、5年で譲位に追い込んでしまいます。こうして敦成親王は9歳で即位して後一条天皇となります。2年後、道長はこの天皇に彰子の妹で20歳の威子を入れますが、今なら法律で認められない叔母と甥の結婚です。そして7ヵ月後に威子は皇后に冊立されます。その立后の儀が寛仁2年（1018）10月に宮中で厳かに行われ、夕刻から再建間もない道長の土御門殿に場所を移して盛大な祝宴が持たれました。

史料Ⓚをご覧ください。祝宴に関して藤原実資は『小右記』に「今日、女御藤原威子を以て皇后に立つるの日なり」「前太政大臣第三の娘、一家に三后を立つること未だ嘗てあらず」と記しています。太政大臣とは道長のこと。一家で出した例がないとある三后とは太皇太后（長女の一条天皇中宮彰子）、皇太后（二女の三条天皇中宮妍子）、皇后（威子）を指します。すべて道長の娘で独占したわけで、前例がないどころか、これ以降も例がありません。道長の喜びも解るというものです。

> 太閤、下官を招き呼びて云わく、和歌を詠まん欲す、必ず和すべし、てへり。答えて云わく、何んぞ和し奉らざらんや。また云わく、誇たる歌になんある、但し宿構にあらず、てへり。「此の世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたる事も無しと思へば」。余、申して云わく、御歌優美なり。酬答する方なし。満座ただ此の御歌を誦すべし。…諸卿饗応し、余もまた数度吟詠す。太閤和解して殊に和を責めず。夜深く月明かに酔いを扶けて各々退出す。

太閤は太政大臣のこと。下官とは書き手が自分を卑下していう言葉で実資を指します。「これから和歌を詠もうと思うので、あなたも一首付きあってほしい」と、道長から問われ、「いや一私なんか」と応じる実資。すると道長は「やや自慢げな歌だが即興だよ」と。そして道長の口をついて出たのが有名な「望月の歌」です。聞いた途端に実資は「何と自慢気な歌」と思ったことでしょうが、それは嘔気（おくび）にも出さず、「なんと優美な歌でしょう、とてもお答えすることができません」と言って、皆で「この世をば」を歌ったのです。これに気を良くした道長は実資が歌わなかったことを責めなかったという。

『御堂関白記』には「ここに於て余和歌を読む。人々之を詠ず。事了りて分散す」とあるのみで歌そのものは記してありません。道長はなぜ「この世をば」の歌を書かなかっ

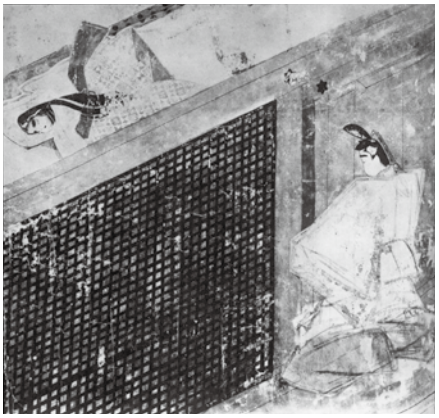
たのでしょうか。その理由は二つ考えられます。当時の貴族たちは翌日の午前中に日記をつける決まりになっていたようです。ですから道長もそうしたのでしょう。酔いがさめて日記に向かってみると、我ながら気が引けたのでやめた、あるいは、何を歌ったか覚えていなかった、かのいずれかでしょう。

栄華の望月で時間もだいぶ超過して申し訳ありません。ご清聴ありがとうございました。

最後に道長と紫式部の関係について『紫式部日記』の記事をお入れしておきます。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、
おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、
夜もすがら水鶏（くいな）よりけになくなくぞまきの戸口
にたたきわびつる
返し、
ただならじ戸ばかりたたく水鶏（くいな）ゆゑ、あけては
いかにくやしからまし

この絵画版が『紫式部日記絵巻』にあります。



角川書店編集部編『日本繪巻物全集』第12巻
〈紫式部日記繪巻・枕草子繪巻〉角川書店発行
「紫式部の局に忍び来る道長」（久松本第三段）より

紫式部の局は土御門殿の寝殿と東の対を結ぶ渡殿（廊下）の一郭にあったのです。ある夜のこと、そこで寝ていたら激しく戸をたたく人があった。訪問者が誰かわからず（内心道長とわかっていたが…）恐ろしくなって、返事もせずに夜を明かした早朝、戸をたたいた男から「昨夜は、水鶏にも負けないほどに槙の戸口を夜通し叩いたのに貴女は開けてくれませんでしたね」という歌が届いた。紫式部は「ただごとではあるまいと思われるほどに、戸を叩く水鶏だけに、きっと開けていたらどんなにか後悔したことでしょう」と返します。ノックするような鳴き方の水鶏はむかし鴨川に沢山いたようです。京都の地下鉄に「くいな橋」という駅があるのはその名残りです。

この歌をめぐって、紫式部と道長は男と女の関係ができたか、できないか、といった論争があります。この歌を額面通りに取ればなかったことになります。この歌云々を離れて客観的に見るならば、私は二人の関係を認める立場です。賢明すぎるのか、男性運に恵まれない紫式部が父親に近い歳で妻も何人かいる男と結ばれ、娘を授かって死別した彼女です。道長の庇護を得ればお家安泰間違いなし。なにも拒むことなどないのではと思います。現に父の藤原為時は、やっと任官できたのが淡路守（下国）でした。それを道長の計らいで越前守（大国）に替えてもらっています。弟の任官にも何かと配慮があったのでしょう。系図の集大成ともいわれる『尊卑分脈』（室町時代）の紫式部の項に「道長妾（みちながのしょう）」とあるのも一つの根拠になるのではないでしょうか。

〈紙数の関係で話題にした幾つかの情報を削ぎ落し、道長の栄華形成に焦点をおいて調整したことをお断りします。〉

源氏物語絵巻（甲子園学院美術資料館所蔵）

公開講座
第二弾！

平成27年度 附属図書館公開講座のお知らせ（予告）

昨秋に開催いたしました附属図書館公開講座には、200名近い方々が参加者してくださり、アンケートにも「また開催してほしい」と次回開催を期待する要望を多くいただきました。そこで附属図書館でも、前回の成果に立脚して今秋も公開講座を開催する予定で準備を進めています。

まだ詳細は決まっておりませんが、本学において10月31日(土)、東京大学大学院人文社会系研究科教授の佐藤信先生をお招きして、「日本古代史の最前線と高校教科書」とのタイトルでご講演をお願いする予定です。

佐藤先生は、1952年のお生まれで、『日本古代の宮都と木簡』（吉川弘文館・1997年）、『出土史料の古代史』（東京大学出版会・2002年）など多数の著書で知られるように、古代都市・木簡学・古代国家財政などの分野を中心にご研究を進められています。その一方で、山川出版社の『高校日本史教科書』の執筆者としても知られています。前記のテーマで、先生の古代史の研究成果とともに、この経験をもふまえてお話していただきます。また先生は、放送大学の講師や創設125年の伝統ある「史学会」の理事長、文化財関係の省庁審議会・都県の保存整備の委員として文化財行政にもご尽力されるなど、日本史のみならず歴史学界を主導する方でもあります。

「聖武天皇と光明皇后－正倉院とゆかりの品々－」

杉本　一樹氏（宮内庁正倉院事務所長）

1. 正倉院宝物の由緒

A 献納宝物（帳内宝物）

①天平勝宝八歳〈756〉六月二十一日献物帳〈国家珍宝帳〉

（巻首願文）

太上天皇の奉為（おおんため）に国家の珍宝を捨して東大寺に入るる願文。皇太后御製。

（中略）伏して惟（おもんみ）るに先帝陛下、徳は乾坤に合し、明は日月に並ぶ。三宝を崇びて悪を遏（とど）め、四摂を統（す）べて休（よろしき）を揚ぐ。声は天竺に籠み、菩提僧正、流沙を渉って遠く到る。化は震旦（中国）に及び、鑑真和上、滄海を凌いで遥かに来たる。……ゆえに今、先帝陛下の奉為（おおんため）に国家の珍宝・種々の翫好及び御帯・牙笏・弓箭・刀剣、兼ねては書法、楽器等を捨して東大寺に入れ、盧舎那仏及び諸仏菩薩一切賢聖を供養せん。

（巻末願文）

右件は皆是れ先帝翫弄の珍、内司供擬の物なり。疇昔を追感し、目に触れなば崩摧す。謹んで以て盧舎那仏に奉献す。……

②天平勝宝八歳六月二十一日献物帳〈種々薬帳〉

（巻末願文）

以前、堂内に安置し、盧舎那仏を供養す。もし病苦により用うべき者あらば、並びに僧綱に知らせて後に充て用いることを聴（ゆる）せ。伏して願わくば、この薬を服する者、万病ことごとく除き、千苦皆救い、諸善は成就し、諸悪は断却し、非業の道より、長く夭折なく、遂に命終の後は花蔵世界に往生せしめ、盧舎那仏に面奉して、必ず証を遍法界位に得んと欲す。

③天平勝宝八歳七月二十六日献物帳〈屏風花氈等帳〉

④天平宝字二年〈758〉六月一日献物帳〈大小王真跡帳〉

（大小王真跡帳　願文）

右の書法は是れ奕世の伝珍にして先帝の玩好なり。遺って筐笥にあり、追感して懼然たり。謹んで以て盧舎那仏に奉献す…

⑤天平宝字二年〈758〉十月一日献物帳〈藤原公真跡屏風帳〉

（藤原公真跡屏風帳　願文）

右件の屏風は是れ先考正一位太政大臣藤原公（不比等）の真跡なり。妾の珍財これに過ぐるものなし。ここにおいて、仰いで以て盧舎那仏に奉献す…

⑥天平宝字三年〈759〉十二月二十六日出蔵帳〈「御劔出」〉

①の「除物」７点のうち、６点の出蔵について記す。→このうち「陽宝劔」「陰宝劔」の２口は、東大寺大仏の膝下に埋納された「東大寺金堂鎮壇具」のなかの金銀荘大刀２振（X線透過写真による「陽劔」「陰劔」銘の発見）。

B 東大寺の資財

①大仏開眼会〈752〉使用品…開眼縷・筆・墨、奏楽と舞、道場の荘厳

②聖武天皇大葬〈756〉・一周忌法要〈757〉などに使用した法具類…櫃覆町形帯、花籠・鎮鐸・幡

③東大寺の諸堂塔・庫蔵からの流入品…「大仏殿」「羂索堂」「東塔」「戒壇堂」「吉祥堂」「千手堂」

C 造東大寺司関係品：正倉院文書・丹・臈蜜など…加工材料、実用品・消耗品

D 聖語蔵経巻：東大寺塔頭尊勝院経蔵（中国・日本の写経・版経）。明治26年献納 → 文献・記録による検討

2. 宝物の内容

用途別分類（宝物の種類）

(1)調度品	厨子・屏風・毛氈・胡床・御床・鏡・軾・挟軾・火舎・薫炉
(2)文房具	筆墨硯紙・刀子・軸・帙・尺・書几
(3)楽器･楽舞具	和琴・新羅琴・琴・瑟・箏・琵琶・五絃琵琶・阮咸・箜篌・尺八・横笛・笙・竽・簫・鼓胴・磬・方響
(4)遊戯具	棊局・棊子・双六局・双六子・双六頭・投壺・弾弓
(5)仏具	袈裟・錫杖・如意・塵尾・誦数・三鈷・柄香炉・花籠
(6)年中行事品	子日手辛鋤・目利箒・椿杖・百索縷軸・針と糸・撥鏤尺
(7)武器武具	大刀・手鉾・鉾・弓・箭・鞆・胡禄・挂甲と馬具
(8)服飾品	冠・袍・半臂・袴・接腰・裳・衫・汗衫・前裳・襪・早袖・腕貫・帯・履
(9)飲食器･厨房具	碗・加盤・皿・鉢・杯・箸・匙・提子・包丁
(10)香薬類	全浅香・黄熟香〈蘭奢待〉・丁香・裛衣香・薬物
(11)工匠具	やりがんな・錯・鑽
(12)書蹟・地図	典籍・文書・経巻・開田地図
(13)容器	櫃・箱・袋・包・几
(14)原料・素材	臈蜜・丹・麻布・ガラス玉・金剛砂

技法別分類

(1)絵画　(2)彫刻　(3)刀剣　(4)金工　(5)漆工　(6)木工
(7)焼き物　(8)ガラス　(9)染織　(10)甲角細工
(11)編み物　(12)製紙　(13)その他（複合･装飾技法）
→ 美術工芸史的研究・実作の立場からの追求

材質別分類

無機材料	金属・石・陶器・ガラス・顔料
有機材料	植物（木材・竹材ほか） 動物（皮革・獣毛・牙角甲骨・貝・真珠・鳥毛ほか）

その他（繊維・紙・染料・塗料と接着剤）
→自然科学的手法による調査

3. 正倉院宝物の時空

時間的要素

A 平城遷都以前　隋唐経，赤漆文欟木厨子（天武朝），大宝二年戸籍（御野・筑前・豊前・豊後），詩序
B 天平まで　唐墨（開元4），漆柄香炉箱銘，金青袋（甲斐国調あしぎぬ），養老五年戸籍
C 天平年間　聖武天皇雑集・光明皇后楽毅論，諸国正税帳，計帳，五月一日経，写経所文書　金銀平文琴，最勝王経帙ほか
D 天平勝宝年間　【大仏開眼会・鑑真来朝・聖武天皇崩御】関係品多数。写経所文書。四分律将来、鳥毛立女屏風
E 天平宝字年間　【光明皇后崩御・恵美押勝乱】出蔵品あり（法華寺金堂・武器武具）。天平宝字二年の正月行事。写経所文書
F 天平神護・神護景雲　【道鏡政権】写経所文書。称徳天皇の東大寺行幸の際の献物
G 宝亀以降　写経所文書（終末）
H 延暦以降　宝物の出蔵件数増加，曝涼点検（平安初期）。中世・近世を通じて生き続けた痕跡。

空間的要素（古代東アジア世界の空間的広がり）

日本（中央と地方。成立期律令国家の版図）
朝鮮半島（新羅・百済）
中国（隋唐帝国），さらに西方・南海地方・北方への広がり。
銘文等により明確に大陸・半島製とわかる品は限られる。
→墨（唐・開元4年〈716〉・金銀花盤・金銀平文琴（乙亥＝開元23年〈735〉）・隋唐経

位相・階層

天皇から庶民まで。ハレ・非日常（大仏開眼・天皇崩御）から日常（「しごと」の生態）まで。仏教色。

参考文献

杉本一樹『正倉院　歴史と宝物』（中公新書1967）2008年、中央公論新社
米田雄介・杉本一樹編『正倉院美術館』2009年　講談社
杉本一樹『正倉院宝物の世界』（日本史リブレット74）2010年　山川出版社
杉本一樹『正倉院　あぜくら通信　宝物と向き合う日々』2011年　淡交社

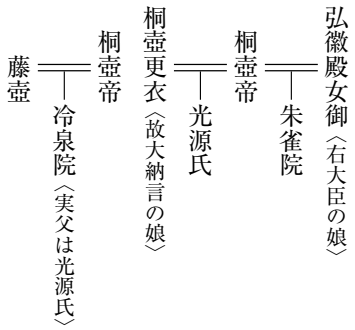
天皇皇后両陛下傘寿記念　第66回正倉院展（奈良国立博物館）
会期：平成26年10月24日（金）～11月12日（水）

日本国宝展（東京国立博物館）
会期：平成26年10月15日（水）～12月7日（日）
（正倉院宝物の出陳期間　10月15日（水）～11月3日（月））

「紫式部と藤原道長の栄華」

朧谷　寿氏（同志社女子大学名誉教授）

Ⓐ賜姓皇族（皇親賜姓）－嵯峨源氏・宇多源氏・醍醐源氏・桓武平氏…



Ⓑ藤原道長『御堂関白記』、御堂－法成寺、全36巻と推定、自筆本14巻（半年１巻、計７年分）、自筆本・古写本は国宝、30歳～56歳「寛弘七年暦巻上」（自筆本第９巻）「件記等非レ可二披露一、早可二破却一者也、」

Ⓒ寛弘5年（1008）7月、一条天皇（29歳）中宮藤原彰子（21歳）出産を控え土御門第へ里下り　道長（43歳）、源倫子（45歳）、紫式部（藤原為時娘、故藤原宣孝妻、30歳半）

◇秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりのこずゑども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。〈『紫式部日記』〉

Ⓓ9月11日、第二皇子敦成親王（後一条天皇）誕生

◇午の時に、空晴れて朝日さし出でたるここちす。たひらかにおはしますうれしさのたぐひもなきに、男にさへおはしましけるよろこび、いかがはなのめならむ。…十月十余日までと、御帳出でさせたまはず。西のそばなる御座に、夜も昼もさぶらふ。殿の、夜中にも暁にも参りたまひつつ、御乳母の懐をひきさがせたまふに、うちとけて寝たるときなどは、何心もなくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ。…ある時はわりなきわざしかけたてまつりたまへるを、御紐ひきときて、御几帳のうしろにてあぶらせたまふ。「あはれ、この宮の御しとに濡るるは、うれしきわざかな。この濡れたるあぶるこそ思ふやうなるここちすれ」と、よろこばせたまふ。

◇渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、「夜もすがら水鶏よりけになくなくぞまきの戸口にたたきわびつる」
返し、「ただならじ戸ばかりたたく水鶏ゆゑ　あけてはいかにくやしからまし」〈『紫式部日記』〉

Ⓔ10月16日、一条天皇、土御門第へ行幸　道長は龍頭鷁首の船を新調

Ⓕ三条天皇中宮妍子が皇女を出産「不レ悦気色甚露、依二令レ産レ女給一歟」〈『小右記』〉

Ⓖ一条崩御→三条天皇、敦成親王立太子→即位＝後一条天皇（9歳）

Ⓗ例ならずおはしまして、位など去らんとおぼしめしける頃、月の明かりけるを御覧じて三条院御製　「心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな」〈『後拾遺和歌集』〉（本意に反して心ならずもこの辛い世の中に生き永らえるならば、きっと今夜のこの月が恋しく思い出されるであろうよ。）「十二月の十余日の月いみじう明きに、上の御局（枇杷殿の藤壺）にて、宮（中宮妍子）のお前に申させたまふ。心にも…」〈『栄花物語』〉

Ⓘ御譲位近かるべきにより道長中宮の参入を停めんとす〈『小右記』長和4年11・15〉

Ⓙ三条天皇、道長の枇杷殿にて御譲位、後一条天皇、道長の土御門第にて御受禅〈長和5年正・29〉

Ⓚ寛仁2年（1018）、威子立后（20歳）、天皇11歳

◇今日、女御藤原威子を以て皇后に立つるの日なり〔前太政大臣第三の娘、一家に三后を立つること未だ嘗てあらず。〕（中略）太閤、下官を招き呼びて云わく、和歌を詠まんと欲す、必ず和すべし、てへり。答えて云わく、何んぞ和し奉らざらんや。また云わく、誇たる歌になんある、但し宿構にあらず、てへり。「此の世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたる事も無しと思へば」。余、申して云わく、御歌優美なり。酬答する方なし。満座ただ此の御歌を誦すべし。…諸卿響応し、余もまた数度吟詠す。太閤和解して殊に和を責めず。夜深く月明かに酔いを扶けて各々退出す。〈藤原実資『小右記』寛仁2年10・16〉

◇また階下に伶人を召して数曲。数献の後、禄を給う。大褂一重。此に於て余和歌を詠む。人々之を詠ず。事了りて分散す。〈『御堂関白記』〉

三后―太皇太后彰子、皇太后妍子、皇后威子

Ⓛ男は妻がらなり。いとやむごとなきあたりに参りぬべきなめり。〈『栄花物語』〉

頼通（18歳）に隆姫女王（村上天皇の孫、15歳）との縁談がきた時の道長の弁。

Ⓜ男は妻は一人のみやは持たる、痴の様や。いままで子もなかめれば、とてもかうてもただ子を設けんとこそ思はめ。〈『栄花物語』〉

6年後に三条天皇から降嫁の話がきたのを喜んで伝えると、当の頼通は隆姫への愛から涙を浮かべて聞いた。この時に道長が吐いた言葉。

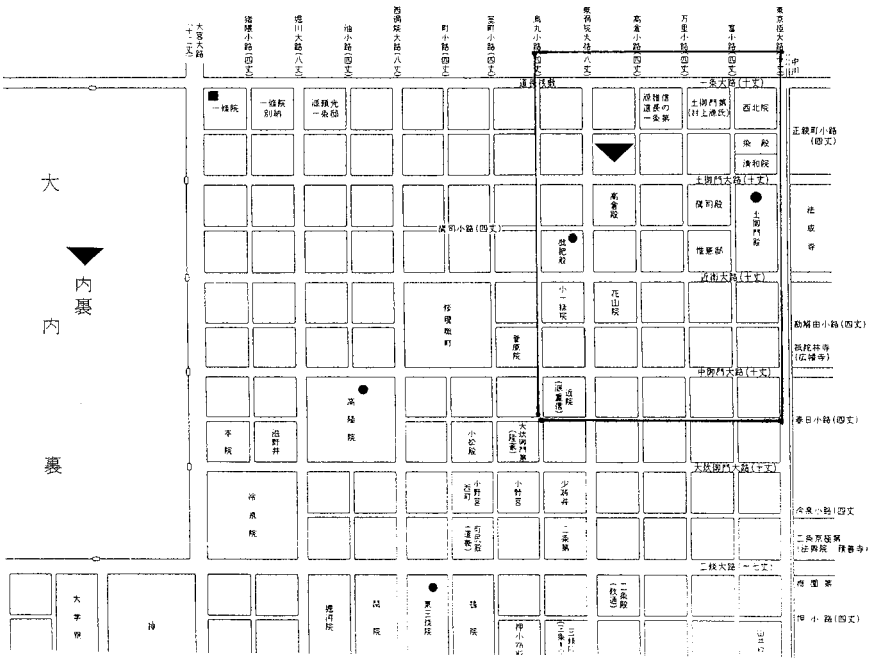
Ⓝ『紫式部日記』に見える『源氏物語』

◇左衛門の督、「あなかしこ。このわたりに、若紫やさぶらふ」とうかがひたまふ。源氏にかかるべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。

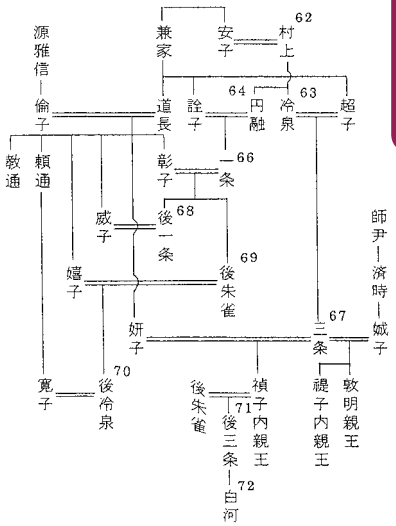
◇うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才るべし」と、のたまはせけるを、…

◇「源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずろ言ども出できたるついでに、梅の下に敷かれたる紙に書かせたまへる。

平安京左京城の北部



道長家と天皇

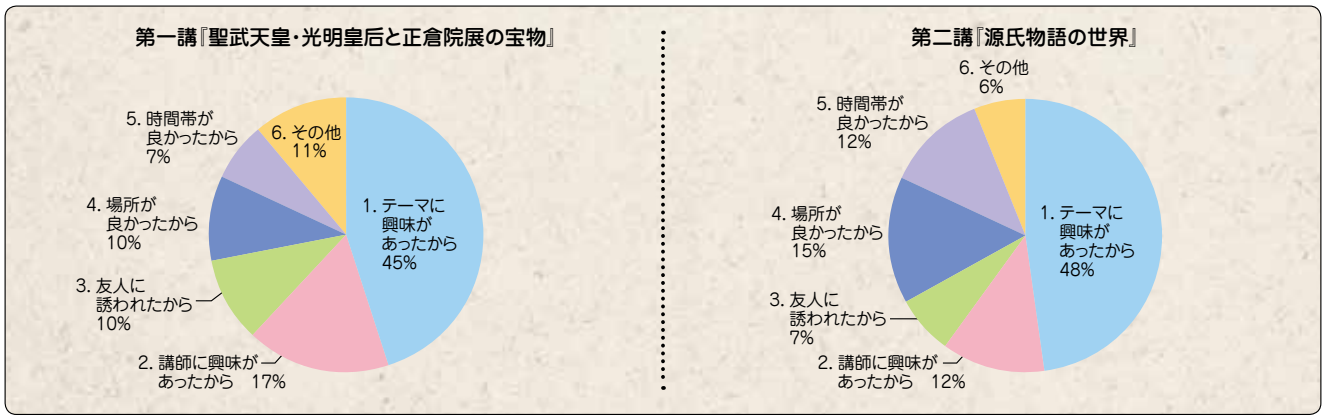


開学50周年記念附属図書館公開講座参加者アンケート結果

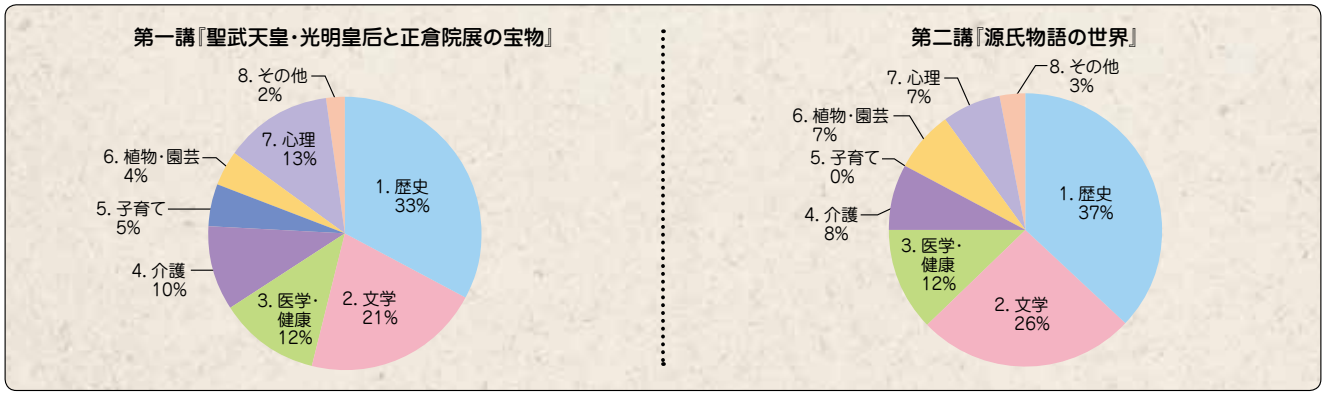
両日を合わせると200名近い参加者があり、盛況のうちに終えることができました。ご協力をいただいた学院関係の方々に御礼を申し上げると共に、参加者の感想をご紹介いたします。

9月27日（土）　第一講　テーマ『聖武天皇・光明皇后と正倉院展の宝物』・・・参加者109名（アンケート提出73名）
10月4日（土）　第二講　テーマ『源氏物語の世界』・・・参加者82名（アンケート提出37名）

●講座に申し込まれた理由をお聞かせください。



●今後どのような講座があれば、参加してみたいと思われますか？



上記のグラフからもわかるように、参加者は歴史や文学に興味を持っている方ばかりでした。自由記入の感想でも、次回に期待してくださるお声が多く寄せられ、地元西宮に関する歴史やゆかりの植物についての講座へのリクエストもありました。「貴重な映像資料を見せていただき、今秋公開の正倉院展に行きたくなった」「藤原仲麻呂などの自筆の文字を見て、時空を越えた歴史が身近に感じられた」「興味深い内容の講義を拝聴し、京都で紫式部や藤原氏にまつわる土地を巡りたくなった」「藤原道長の政治に関する考え方と攻略を織りまぜての講座で、大変おもしろかった」など、講座内容にとても満足していただけたようで、「今回の公開講座に参加して、甲子園短大がすごく身近に感じられるようになった。地域に根ざした今後の活躍を！」「回数を増やしてシリーズ化してほしい」といったお声もありました。

リクエストにお応えした公開講座第二弾の詳細は12ページをご覧ください。

あ・と・が・き

この度、『図書館ニュース』特別号を発刊することになりました。附属図書館では、瀧上凱令学長の「図書館ニュース特別号発刊にあたって」との巻頭言にありますように、昨秋９月27日(土)には宮内庁正倉院事務所長の杉本一樹先生、10月４日(土)には同志社女子大学名誉教授の朧谷寿先生を講師にお招きして、開学50周年記念の公開講座を開催いたしました。参加してくださった200名近い方々からはご好評をいただくとともに、講演の内容について当日配布された資料だけでなく、講演内容の概要があればさらに理解が深まるとの要望も寄せられました。そこで附属図書館ではこれに応えるべく検討して、甲子園学院の特段のご理解のもとに、概要を『図書館ニュース』の特別号として発刊することにいたしました。このような事情から、杉本・朧谷両先生にあらたにご高配をいただくことになりました。両先生にはご多忙のところ感謝申し上げます。

この二回にわたる開学50周年記念附属図書館公開講座の開催にあたって甲子園学院理事長久米知子先生はじめ甲子園短期大学の瀧上凱令学長・教職員、そして甲子園学院学校園の教職員のみなさまにはご理解とご協力をいただきましたことにお礼申し上げます。また録音テープからのデータ化や本誌の編集など煩雑な一切の作業を担当してくださった司書の猿丸恭子さん、そして図版写真の掲載にご尽力いただいた甲子園学院美術資料館の宮本郁雄さんにもお礼申し上げます。　（図書館長・木本好信）

編集発行
甲子園短期大学図書館
〒663-8107　西宮市瓦林町4-25
TEL.0798(65)3300
FAX.0798(67)9101